

根治につながる新薬も

となる。
近年は原因の特定や発症のメカニズムの研究が進み、症状の緩和などの対症療法しか
が期待できる新薬も登場している。専門医による正確で速やかな診断の重要性が増している。

倦怠感・ふらつき受診を

総合南東北病院(郡山市)

金子知香子 脳神経内科長



神経難病は多岐にわたるが、平均寿命が延びた現代では誰しもがかかるかもしれない病気である。筋ジストロフィーや脊髄小脳変性症など治療法がない疾患もあり、リハビリを続けてつきあっていく必要がある。本人や家族に悔いがないようにサポートしていく。

神経難病では急に症状が悪化し、搬送が必要なほど呼吸が苦しくなることがある。当院は、急性期の神経系救急疾患にも対応ができる体制づくりをしており、地域の中核病院を担っている。

これまでステロイド薬による

経難病も研究が進んだ。パーキンソン病や重症筋無力症は平均寿命まで生きられる病気となった。自己免疫疾患で視力の低下などが表れる多発性硬化症も、リンパ球が神経を攻撃するのを阻害する薬などを使った治療などによって長く普通の生活を送れるようになる。

動きにくい、倦怠感がある、ふらつきなどの症状が出ていても、診断がつかないまま過ごしている方がいる。早く治療を始めることで治療薬の有効性が高まる難病もある。症状が解決しなければ、脳神経内科の受診を検討してほしい。治療法がない病気でも診断をし、介護サービスを受けられるように道筋をつけるのも専門医の役目だと考える。

病院の実力

～福島編 209

神経難病

今回の病院の実力は神経難病を取り上げる。一覧表には主な病気の年間患者数や常勤専門医の数などを載せた。難病とは、原因不明で治療法が確立しておらず、患者数が少なく、長期の療養が必要な病気のことをいう。神経難病は、脳や脊髄に存在する神経細胞に異常が起きたり、減少したりすることで、認知機能や運動機能が低下する病気の総称だ。

神経難病で最も患者数が多いパーキンソン病は、10万人あたり150人前後とされる。主に50歳以上で発症し、高齢になると罹患率が上がる。手足が震える、筋肉が硬くなる、全身の動作が鈍くなるといった症状がある。一覧表ではパーキンソン病、重症筋無力症、多発性硬化症、脊髄小脳変性症、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の五つの主な神経難病の年間患者数や、筋ジストロフィー、脊髄性筋萎縮症など小児(18歳以下)の神経難病の年間患者数を示した。

このほか、経験豊富な専門医が認定される日本神経学会の神経内科専門医や、日本小児神経学会専門医の常勤医数も掲載した。専門医の数は、より正確な診断や最新治療に

病院の実力「神経難病」

医療機関別2024年治療実績(単位は人)
(読売新聞調べ)

医療機関名	主な病気の年間患者数	神経内科専門医(常勤)◆	子どもの年間患者数	小児神経専門医(常勤)◆
福島				
総合南東北	1247	4	3	1
県立医大	363	8	25	1
竹田総合	※109	4	※21	1
宮城				
大崎市民	604	1	1	0
東北大	536	24	2	3
斎藤	524	2	0	0
東北医科薬科大	317	7	—	1
石巻赤十字	312	1	13	0
栃木				
自治医大	950	7	23	6
済生会宇都宮	759	4	55	0
国際医療福祉大	707	4	16	0
独協医大	245	11	50	3

◆今年4月現在
「—」は無回答または不明
※入院患者のみ

全国の調査結果は19日の「からだ」面に掲載しました。